連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「田北左近将監～『府内大風流』に参上～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2022年10月28日(金)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

田北左近将監　「府内大風流」に参上

時宗の特徴的な宗教行事に、念仏踊りがあります。念仏や和讃を唱えながら、かねや太鼓を打ち鳴らして踊る芸能で、室町時代以降は風流踊りとして最盛期を迎えました。

大友義統が記した「当家年中作法日記」によると、16世紀の豊後府内（大分市）では、毎年7月12日と26日に「大風流」が開催されていたことが分かります。次の史料は、実際に7月12日の風流が、大友家の年中行事の一つとして、領内の家臣を府内に招集して開催されていたことを示しています。大友義鑑が家臣の田北左近将監に宛てた書状（「田北文書」）です。

「来たる十二日に風流の儀を申し付け候、急度出頭をもって馳走肝要に候、油断有るべからず候、恐々謹言」

書状の日付は「七月五日」。当主義鑑は、1週間後の7月12日に風流踊りを催すので、府内に出向いてその興行に加勢するよう命じています。

「府内大風流」への出頭を命じられた田北氏は、大友氏の有力庶家です。他の史料によると、天文23（1554）年の「田北左近将監鑑興」と、永禄12（69）年の「田北左近将監鑑忠」が検出されます。いずれも義鑑から「鑑」の1字を賜って（これを「偏諱」といいます）、義鑑の検使（使者）としての活動が確認できます。

風流踊り（米沢市上杉博物館蔵「洛中洛外図屏風」より）

「当家年中作法日記」には、府内での風流の際に、「まハりに百人計、鳥甲大口そばつぎ（傍続）を着し、大つゝミ（鼓）にて、むてにはやし候、中に五十人ハかり、扇獅子を舞い候」との様子や、「金銀のはく、たゝニ日本物のことハ申すに及ばず、唐土、天竺、南蛮、高麗の綾羅錦繍をもってかざ（飾）りたて」たことが記録されています。鳥兜（鳳凰の頭をかたどった冠）をかぶり、傍続（袖なしの羽織）を着て大鼓ではやす人々や、扇獅子舞を舞う人々、そして、金箔・銀箔やアジア各地からの舶来衣装で着飾って行列を組み、あでやかに舞う人々など、伝統行事「府内大風流」のにぎわいが伝わってきます。

中世の大友氏領国に生きた人々にとって、毎年の7月12日と26日は、府内の時宗寺院称名寺門前の道場小路の近辺で、華麗な衣装を着飾った武士や民衆が行列を組み、舞台で歌舞を舞い、はやし物を伴って輪舞する、都市が日常から解放され、人々が信仰に専心乱舞できる特別な日でした。義鑑の命に応じて府内に参上した田北左近将監も、自ら踊りに加わって舞ったことでしょう。なお、この風流踊りは、現代の盆踊りの起源にもなっています。

（名古屋学院大学国際文化学部教授）

＝月1回掲載＝